博士論文『行基論 ―大乗仏教自覚史の試み―』 要約

角田洋子

僧尼令が寺院外での僧尼の仏教活動を禁止していた時代に、国家から糺弾を受けながら平城京を中心に布教活動を続け、畿内に四十九院といわれる道場を拠点として大規模な教化活動を展開した行基集団の活動はなぜ可能であったのか。そこには行基と弟子等を動かした国法を凌駕する仏教上の強固な自覚的思想・信念が想定される。従来、行基の思想については諸説が提示されているが、行基を含む弟子僧等全体の思想の問題として考察された論考はほとんどなく、行基個人の指導性が強調されてきた。養老元年、国家に危機感を与えた行基とその弟子等の活動は、彼等全体が共鳴し共有していた仏教思想の問題として追及される必要があると考えた。また彼等の活動を支えた仏教思想・教義の受容については、玄奘から道昭へ、道昭から行基はじめ八世紀初頭の官僧尼へという系譜を、僧尼達の主体的な仏教思想の受容・実践の問題として捕らえ、その歴史的必然性を明らかにしたいと考えた。

以上、本論考では民衆への大規模な布教活動の先駆となった道昭・行基とそれを支持した僧尼たちの思想的背景について、日本古代の僧尼による大乗思想の自覚的受容という観点からその歴史的必然性を問う形で考察を試みた。

序章　　本論考の課題

行基の仏教活動を知る上での同時代史料である『行基年譜』年代記部分および「大僧正記」の信憑性が高まった今、行基の布教活動の展開、また行基と行動を共にした弟子僧らの実態について改めて考察する必要が生じている。

僧尼令違反を敢えて犯し、寺院を出て行基を核とした僧尼等が朋党を組み民衆への布教活動を断行、かつ持続した思想的基盤には大乗仏教思想の自覚的・主体的受容があったであろうと想定し、どのような歴史的条件のもとでそれが可能であったのかを追究・検証することを本論考の課題とした。

第一章　　研究史

膨大な行基研究の蓄積の中から、本論考で課題とした行基集団の思想と弟子組織に関する研究に絞って研究史を整理した。行基の思想的背景についても長い研究の蓄積があるが、『続日本紀』行基伝に記されている「初出家、読二瑜伽唯識論一、即了二其意一」に対しては疑問が呈されて久しい。近年、玄奘に学んだ道昭が伝えたのは瑜伽唯識論、とりわけ『瑜伽師地論』であったことを史料から検証された志水正司氏の論考は、思想の伝来を歴史的必然性の上に考察された点で注目される。志水氏の論考に依拠し、『瑜伽師地論』と行基実践の関係を大乗思想の自覚的受容という視点からあらためて追究することを課題の第一とした。行基研究では行基カリスマ論が根強く、行基事業に協力した豪族層の存在は重

視されてきたが、共同事業者としての弟子の存在については必ずしも十分考察されてきたとはいい難い。特に活動の初期から行基と行動を共にした弟子僧については研究史上その解明に課題が残っていることを明らかにした。

第二章　『瑜伽師地論』と行基集団

玄奘のインド求法は単なる経典の将来ではなく、『瑜伽師地論』を学びその典籍を唐にもたらすことが目的であったことを明らかにし、道昭が玄奘から学び日本に伝えた経典の中核に『瑜伽師地論』があったこと、行基の実践にもその影響がみられることを志水氏の検証を踏まえさらに詳説した。また『瑜伽師地論』は大乗仏教思想とその具体的実践を集大成したものであること、玄奘は大乗思想の熱烈な信奉者であり普及者でもあったことから、道昭の禅院建設や、布教、天下周遊などの実践には大乗思想の実践的指南書である『瑜伽師地論』「菩薩地」を玄奘から自覚的に学んだ影響があること、行基はそれを継承していることをいくつかの史料より考察した。本章では大乗思想が日本古代の僧尼に主体的・自覚的に受容され、実践を促すに至った経緯を明らかにした。

第三章　初期道場と行基集団

行基の活動拠点であった道場という仏教施設に注目し、行基が次々に建てた施設がなぜ道場と呼ばれたのか、道場とはいかなる仏教施設か、道場が日本の古代仏教史に登場してくる歴史的意味についても考察した。道場の語は僧尼令・非在寺院条「別立二道場一。聚レ衆教化」が史料上の初見であり、大宝令に規定された日本独自の条文といえる。この条文が成立してくる背景に道昭の活動があったことを推測した。道場は基本的には禅修行の場であり、禅行を含む六波羅蜜の修行を必須とする大乗菩薩行の実践を重視する僧尼の誕生と、道場の出現は軌を一にするといえるのではないだろうかと考えた。行基はこの道場を拠点として教化活動を組織的に展開した。

第四章　行基集団と四十九院の運営

養老元年の行基とその弟子糺弾の詔を改めて分析し、このときの弟子等が官僧であったこと、彼等は行基と朋党を結び、次々に建てられてゆく道場の運営に当たったであろうことを推測した。従来養老六年格による民間布教の取り締まり強化後の社会事業が行基の仏教活動として注目される傾向にあったが、自らの生家を布施して家原寺として以降、陶邑への大須恵院の建立にはじまる道場建設を追い、行基の布教の戦略を推測した。『続日本紀』に「留止之処、皆建二道場一。其畿内凡卌九処、諸道亦往々而在。」と書かれた道場の運営には、行基と行動を共にした弟子僧が当たったと考えられ、四十九院の主な道場についてその布教活動上の意味を考察した。

第五章　天平十五年の法会と行基

大乗菩薩行の実践者として民衆救済事業に尽力した行基が、国家の大仏建立事業に勧進として弟子等を率いて参加しやがて大僧正に任命されたことをめぐり行基の「転向」問題として長く論争されてきた。七十年代に行基研究史をまとめられた諸氏も、行基の主体性の問題としてどう捕らえるかという研究者の立場を重視している。筆者としては、これを大乗思想の普及の問題として捕らえた。天平十五年正月の諸国を巻き込んだ大々的な法会で国家は初めて「大乗金光明經」の語を用い、聖武天皇は金光明寺での転読に招請した四十九の大徳と共に菩薩の道を歩むことを宣言した。こうした国家の仏教思想の受容の変化が、行基等に協力姿勢を取らせたのではないかと推測した。

補論　　「大僧正記」について

「大僧正記」と呼ばれている史料は、行基の弟子が組織性をもって、十弟子、翼従弟子、故侍者、親族弟子に分類され、各グループの指導僧達の法名・僧位・出自・所属寺院などが記録されている史料である。土塔の文字瓦に同一人物と目される僧名がみつかったことから史料としての信憑性が高まった貴重な同時代史料である。しかし現在伝わっている三写本そのものの検討もまだ行われていない。補論では三写本の校訂を行った上で、より原史料に近い写本を特定し、そこからわかる行基集団の性格について考察を加えた。本史料は行基晩年の弟子組織の完成形を示すと考えられるが、養老元年詔に既に登場する弟子等の層の構成をある程度推測させるものでもあると思う。

おわりに

行基集団は『瑜伽師地論』「菩薩地」の説く大乗菩薩行の思想に共鳴し、そこに出家者としての自らの生き方を見いだした僧尼等によって当初形成され、その集団が大きく成長し民衆の知識集団を指導したと考えられる。その痕跡を様々な史料からあらためて読み解いたことが本論考の中心になっている。行基集団の当時の情勢に応じた独創的な活動には「菩薩地」の説く実践への示唆と、それを当時の律令体制下で応用していった畿内中小豪族出身の僧尼等の智慧の結集があったと考えた。